國學院大學学術情報リポジトリ

折口信夫と神道・国学：公開学術講演会

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阪本, 是丸 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001756

公開学術講演会（令和元年 11 月 16 日）

折口信夫と神道・国学

阪　本　是　丸

はじめに

私は、歴史的に過去の人物あるいは過去の出来事というのは、なるべく正確に調べ、お話することが、大事なことだと考えています。いわゆる「国家神道」の研究ということで、かれこれ 40 年ほど行なってまいりましたけれども、研究の切り口としては、まず見取り図として、制度的なものを見渡し、それがどのようなイデオロギーや考え、情念等を背景にして出来上がっていくのか、それぞれを個別に、正確に検討する必要があると考え、着手しました。

その中で、自分なりに色々と考えてはいたわけですけれども、幕末維新期から近代をやっていると、昭和 20 年の敗戦に至る昭和前期の時期というのは、明治維新とともに 1 つの大きな日本の転換点といいますか、ある意味では、明治維新にも匹敵するような、古い時代の大化の改新は別としても、折口信夫という先生だけではなくて、当時の神道、国学的な考え方、あるいは新国学も含めて国学とは何かという、そこにぶち当たった時代だったのではないかと思います。

折口先生の神道、国学論を考えるに当っては、こうした当時の時代背景や、神道、国学的な考え方、國學院大學、神社界との関わりや人脈、或いは新国学も含めて、「国学とは何か」、ということを踏まえて考えなければならないと思うわけです。

戦後の折口先生の「神やぶれたまふ」という長い詩には、その後に反歌

がついておりますが、その中で、信が薄い者に対してでも自分は恥じない、「敗れても神はなほまつるべき」と歌で書いておられます。それは結局のところ、「神とは何か」ということにつながるわけです（「神　やぶれたまふ」『近代悲傷集』角川書店、昭和27年）。

十人組徒党事件とその背景

折口先生の神道、国学論といえば、多くの方が本を出していますし、私も大抵のものは見てきたつもりですけれども、その人たちがどういう評論、評価をしたとしても、私にとっては、折口先生との出会いというのは、「十人組徒党事件」ということになります。

折口先生については、昭和12年に第一書房から出された『短歌文学全集　釈迢空篇』という短歌集の中に、「自撰年譜」というのがありまして、昭和8年2月に、「十人組なる徒党、事あり、教育の無意義を痛感する」という記述があります。これは、十人組徒党事件についての、ある意味では唯一の典拠になっているわけです。たった1行ですが、あの先生らしい書きっぷりです。よく言えば、さっぱりしているけれども、書きたくないものなら、書かなくてもいい、ということなのでしょう。

「自撰年譜」というのは、自分の短歌を、ある意味では跡づけるような形で、どこそこに行ってこういうことをしたという、当時つくられた短歌の背景がわかるような形で編まれたものです。また、この短歌集は、単なる短歌集ではなくて、1月から12月までに自分が書いたもののエッセンスみたいなものを書いていて、これはこれで非常に面白い内容となっています。

「十人組徒党事件」というのは昭和8年ですが、昭和6年には満州事変、昭和7年には五・一五事件などが起り、様々な事件があった時期です。国家主義、右翼の抬頭といった時代背景があり、國學院でも出てきました。同じ昭和8年の神兵隊事件においても、國學院から何人か出撃しました。これは一種のクーデター未遂事件みたいなものです。

当時の國學院は単科大学でしたから、学部といえば、大学、文学部のこと

です。学部には道義学科、国史学科、国文学科の３つがありました。その中の道義学科には、後に國學院の出身としては初めて学長になられた河野省三先生がいて、当時の國學院、あるいは國學院だけではなくて、国学、あるいは神道を牽引する一番の先生でした。その先生が倫理の主任でした。それから、もともと西洋哲学を専門とされていた松永材先生が哲学、この方は早稲田高等学院の教授も務めておられました。

当時の道義学科というのは、学生が多くて５、６人、少ない時は学生がいないみたいな状況で、私の父などが卒業したときは、倫理科はたった２人でした。もう一方は、中西旭先生で、東京商科大学から学士入学で来られて、後に台北高等商業学校の先生をされて、戦後は神社本庁の教学顧問などもされた方です。基本は会計学で、中央大学の会計の先生をやっていました。戦前はゼミも２、３人とかで、当時の国史、国文もとても少なくて、国文であれ、国史であれ、道義であれ、みんな知った者ばっかりという小規模な大学でした。

また、松永材先生の影響で弁論部がありまして、部の顧問は松永先生がやっておられました。その当時、この国家、社会を何とかしなければならないという青年将校のような考え方、あるいは様々な思想家、運動家、橘孝三郎の愛郷塾などの影響もあり、それに反対する、いわゆる左翼の学生たちもいて、各所で弁論大会が行われていました。

しかし、単なる弁論だけでは、という方面では、大東塾の塾長となった影山正治がいて、歌をはじめ、非常に深く、広くいろいろ勉強をされていました。この方が、当時の國學院のあり方を小説形式で書いておられます。それが『一つの戦史』（大東塾出版部、昭和 32 年）という本です。その中で、松永先生などは、「松木先生」となっていますが、本名で出てくる人もいます。そういう人たちが父の周りにいたわけです。

また、十人組徒党事件の前年の昭和７年には、大学をめぐって問題になった上智大学事件がありました。当時は配属将校が大学に入って、必ず軍事教練があり、その教練がとれなければ、卒業もできない時代です。上智大学の予科の学生が靖國神社への参拝をしなかった。全員ではないのですが、そう

いうのが1人でも2人でもいれば、配属将校が引き揚げるということで、大問題になったわけです。これは戦後の評価では、上智大学が国家権力、あるいは軍部に屈服して、靖國神社への参拝があったということになるのですけれども、そんなに単純なものでもないのです。そういった事件が続々とありました。

上智大学でそれがあってから、昭和10年に起きた同志社の「神棚事件」等もあり、軍部だけではなくて、左翼の学生もいて、昭和の初めですが、いろいろと大変な時代だったのです。十人組徒党事件というのは、こうした時代背景の中で起きた事件だということです。そして、軍事教練と配属将校の問題というのは、単に上智や同志社だけの問題ではなくて、國學院にもあったということです。

また、『國學院大學百年史　上』（國學院大學、平成6年）においても触れられていますけれども、國學院大學の会計不正事件というのが昭和8年になって発覚します（第3章第6節「会計不正事件と理事監事の交替」）。簡単に言えば、使い込みです。それをかぎつけて、大学を揺さぶる。恥ずべきことですけれども、校史にも書いてあります。

折口先生が「自撰年譜」において、「教育の無意義を痛感する」と書かれたのも、当時先生は予科から学部とか、高等師範部、それから、神道部といいまして、学部とは扱いが違うのですけれども、4コマ持っておられて、大体自分たちが教えた、というのがあるわけです。私としては、今のところ、ここまでは申し上げられるかなと思っているのですが、大学の歴史といいますか、あまり触れたくないようなことでも、きちんと残しておく、知っておく必要があると思います。

國學院大學と折口信夫

あと一つ、大学の校史みたいな話になってしまいますけれども、当時國學院でそういう問題が起こったのは、実は國學院が大学に昇格するとき、他の大学とは全然違う形態をとったことがあります。大正7年に公布された

「大学令」によって、私立の大学や帝国大学以外の官立大学もできることになりました。このときに、私立の大学へと昇格したのは、大正9年に、慶応義塾、早稲田、國學院、中央、日本大学、法政、同志社ですから、本当にわずかだったのです。

当時は、現在のような学校法人ではなくて、財団法人中央大学、財団法人法政大学、財団法人日本大学という形で、同じ名称の財団法人が大学を設置するということになりました。但し、同志社と慶応義塾だけは違いまして、財団法人慶応義塾、財団法人同志社となっています。

けれども、國學院は、財団法人皇典講究所が設置する國學院大學、つまり、法人名と大学名とが一致しない大学だったのです。それがだんだん問題を生んできたわけです。会計の不正問題も、財団法人の皇典講究所に力があって、稼ぎ頭は國學院大學ということになり、それに対して不満が出てくる。改革の要求が学生たちから出てくるということになります。

当時、学長は服部宇之吉という義和団事件などにも関わった偉い儒学、漢学の先生です。その後に、理事であった市村瓚次郎という東洋史の先生が学長になるのですが、服部宇之吉先生などにも、どんどん要求が来るわけです。それらを何とか聞かなければならない。

でも、そういうときに、財団法人皇典講究所、例えば、会計課長というのは、大学にあるわけはない。大学の自治、独立は、学部、あるいは高等師範部、予科ももちろん、國學院が持っています。これは、ある意味ではいい面なのです。つまり、皇典講究所を通して神職養成とか、有栖川宮幟仁親王の告諭に従って、国体を講明するためのいろいろな事業をする。その事業の一つとして、財団法人皇典講究所が國學院を経営する。しかし、皇典講究所イコール國學院みたいなところもありましたから、当時は本所、本学という言い方をしていました。そういった意味で、國學院の特殊性があったわけです。

本学には、平成19年の研究開発推進機構の発足とともに、校史・学術資産研究センターができました。当然、学問的なことも含めて、当時の資料をちゃんと保存して、きちんとした大学の歴史を、百年史にしても、何年史に

しても、もう一度資料を検討して、そのまま鵜呑みにしないことが重要だと思います。

現時点では、十人組徒党事件については、未だ不明な部分も多いのですが、いずれ背景や事実がわかる日が来るように、従来の記述に不審な点があれば、それをきちっと考えて、調べていく。それこそ、本当に学問的な地道な作業をしてもらいたいと思います。

こうした大学の歴史については、この頃各大学でも校史の研究が非常に流行っていますが、國學院大學においても、今まで百年史もありますし、この間、『國學院大學 130 周年記念誌』（國學院大學、平成 24 年）も出ました。まさしく、そうしたことをきちっとやっていけば、折口先生の本学における、あるいは神社界における位置づけもわかってくるのではないかということです。

お配りしたレジュメには、折口先生と神道界、神社界との関わりについて書いていますが、今までも折口先生に関しては小論、研究も含めて何百と切りがないぐらいの多くの論考が出ています。だけれども、國學院にいる者がこの大学と一番関係の深い神社界、これは戦前も戦後も変わらないわけです。釈迢空ですから、お坊さんだと思う人がいるぐらいですけれども、折口先生は、最初から最後まで神道人として、神の観念とか、天皇をめぐって煩悶されるわけです。

例えば、大嘗祭の「真床襲衾」にしても、武田祐吉先生などとも違うところがたくさんあります。武田先生は、天孫降臨の際の「真床襲衾」に触れて、それは単に邇邇藝命だけではなくて、今に続く代々の天皇が常に皇孫なのだ、それは天孫降臨のときから来ているのだとおっしゃっていまして、それぞれの解釈があります（武田祐吉「天孫降臨の本義」『国体の講明』皇典講究所講話集第 7 輯、皇典講究所・國學院大學、昭和 11 年。「日本書紀の本文に於いて、天孫邇邇藝の命に対し、高御産巣日の神が、博愛を鍾きて崇養し給ふと言へるもの、また真床襲衾を着せまつりてお下しになると言ふも、いづれもこの意に外ならぬのである。しかもこの御幼少の御降臨といふ事は、所謂

嬰児降臨の義であつて、言を換ふれば、天皇御降臨の義である。高天の原から天照大神の詔命によつて、豊葦原の瑞穂の国の君主としてお降りになるのは、ひとり邇邇藝の命の御事蹟たるに留らずして、代々の天皇が御降臨の形式に於いて、高天の原から御降臨あらせられるのである」)。

あるいは、大正の初めにも、八代国治先生という本学出身の偉い歴史学者が、南北朝の長慶天皇の研究をされて、長慶天皇が天皇に加えられることが決まりました（八代国治『長慶天皇御即位の研究』明治書院、大正 9 年)。その先生も、大正 4 年の時点では、践祚されて、即位式そのもので、現御神、現人神になられるということを仰っている。これは横浜の神職会で講演された内容です。

天皇、あるいは、現人神とか現御神、「惟神」とはどういうことなのかということ等に関して、山本信哉先生、植木直一郎先生など、当時多くの方々が真剣に議論して書いておられます。その中の一人が折口先生だったわけです。

こうした中で、戦前に折口論が力を持ったかどうかということではなく、様々な学者がいた時代状況を踏まえながら、等身大に見るべきだろうと思います。むしろ戦後になって折口論が肥大化したということは事実です。

折口信夫と『國學院雑誌』

それから、私は短歌の雑誌が好きなものですから、『日光』という短歌雑誌があって、それを見ていますと、折口先生とこれらの学者達との間でいろいろな葛藤や相剋があったことが分かります。その中には、普通の学術雑誌にはないような情報が入っています。

そういう葛藤や相克の一例として、折口先生が書いた「異訳国学ひとり案内―河野省三足下にさゝぐ―」(『國學院雑誌』第 26 巻第 10 号・第 12 号、大正 9 年 10 月･12 月）というものがあります。ただ､この先生も悪く言えば、あるいは見方によれば、『國學院雑誌』を自分たちのものにしていこうというところがありました。

この「異訳国学ひとり案内」に対しては、河野先生が後で書いておられ

ますが、当時は若気で、論争をしたかったけれども、自分はあえてしなかったとおっしゃっています（『折口信夫全集』第20巻神道宗教篇、中央公論社、昭和31年の「月報」第17号。河野省三「折口さんの異訳国学を頂いた頃」）。

こうしたことは、資料とか雑誌を、何でもいいのですけれども、丹念に読んでいって、どういう状況だったのかということを考えて調べてみる。それが本当の意味での校史研究になるだろうということを私は思うわけです。

例えば、『國學院雑誌』のことは、よく言えば折口先生の改革精神なのです。今までの『國學院雑誌』ではだめだと。すごく清新な、先生が言う本当の国学みたいなものにあふれた、あるいは文学味のあるものにしようと。単なる国民道徳ではないのだということで、変えようということです。ただ、かなりの野心家といっては何ですけれども、自分が思う、こうしたいというのをずっと行なっていく先生だった、そういう性格があります。

１つの資料としてレジュメにも掲げておきましたが、折口先生が『國學院雑誌』を改革することを示すものとして、小林謹一という人に宛てた書簡があります。これは書簡ですが、読もうと思えば、だれでも読める資料ですけれども、この中で「都合によると、学校の雑誌を、友人らとやることになるかも知れません。さうすれば、すこし、読みごたへのあるものに改めたい、と考へて居ます」、と書き送っています（大正9年11月3日付書簡。折口信夫全集刊行会編『折口信夫全集34』中央公論社、平成10年）。

それから同じ月に、「國學院雑誌は、お察しの通り、一月からいよいよ、私どもですることになりました。わからずやどもと喧嘩する迄は、やって見よう、と思ひます」と書いています（大正9月11月22日付書簡。同上）。ここに、『國學院雑誌』を改革するためには、労を惜しまないという意欲をかなり強めていたことが分かると思います。

折口信夫の短歌への想い

折口先生はいろいろなところに旅行していますが、特に信州ではいろいろなところに行かれていて、神道関係、天皇関係のお話もされています。ご存じ

の方がどれぐらいいらっしゃるか知りませんが、この小林謹一という人は、子供の教育に従事していて、小学校の先生をしていまして、東京に出てきて、また戻った方です。折口先生が信州に行ったときには、非常によくもてなしをして、短歌もありました。年は折口先生より上なんです。

そのお弟子さんとして、和合恒男という人がいます。

和合恒男は、簡単にいえば、農民運動といいますか、単なる運動だけでなくて、瑞穂精舎という学園みたいなものを作りました。そこに折口先生にも来てもらって、神道の講義もしてもらったようです。その内容は、全集34巻には出ていますけれども、それまでは載っていなかった（「民俗生活史より見たる農民の位置」昭和8年3月10日瑞穂精舎短期講習における講演筆記、『百姓』第3巻5号、昭和8年5月）。

和合恒男が出した『百姓』という雑誌そのものを見なくても、全集に載っています。ただ、雑誌というのは、ある部分だけを見て、もちろんその人を語るには十分なのですが、全体を見渡すのがとても大事なことです。特に編集後記を見て、どういう人が編集しているのか、どういうつもりで依頼したのかというのは、近世であろうが、いつであろうが、とても大事なことです。実際自分の目で見てみる。

いずれにしろ折口先生の性格の一面、改革精神といいますか、思いというのは、神社界に対しても同じであったということです。ですから、折口神道論の神社界への浸透というのも、自分自身の神道論というもの、それこそどうやって神道を浸透させていくか、一種の戦略をお持ちだった。

そのかわり非常に厳しかった。短歌と学問の両立、ですから、お弟子さんに対して、お弟子さんだけでなくて、神社界の読者に対しても、厳しかったのです。折口先生は、昭和17年5月に、『皇国時報』という今の『神社新報』の前身のような、神社界の機関誌における歌壇の選者になりますが、そのときにも、自分が選者になった以上は、今までのような生ぬるい歌ではだめだ、もっと厳しくやると書いておられる（「選者の言葉」『皇国時報』第815号、昭和17年5月11日。「今後ある期間、皇国時報の短歌一切について、責任

を持つて、関与することにした。実は其ほどのり出す必要もない様に思ふが、するからなら、皇国時報から、無意味な遊戯三昧の歌をとり去るのが、意味ある為事だと思ふからである。ひいては、たとひ一部でも神道と短歌の上に、意味のある美しい文学を将来したいと思ふからである」)。

それから、戦後も『神社新報』の歌壇の選者にお願いされたときにどうしたかというと、神道宗教のために、それにこびるような形で、それを歌い込んだような歌などはだめだと言っています。要するに、歌、作歌、創造ということに全身全霊をかける。そういうことが言いたいために歌をつくるんだったら、ちゃんとした論でも書きなさい、そっちのほうがよっぽどわかりやすいと。簡単に言えば、短歌をなめるなということです（「選者の言葉」『神社新報』昭和22年2月24日号。「短歌はどこまでも文学の一つである。之を作ることは別に、ほかの目的があつてすることではない。世道人心の為に、又この新聞などからすれば、適切に神道宗教の為にすべきものなるかのやうな考へを持つ人もあるかも知れぬ。併しまづ何よりも短歌は文学である。文学であることの目的を十分に果たして、同時にそれがさうした意味にも通じるやうだつたら、それほど結構なことはない。だが、正面からその目的を以てするなら、論文もあり、その他種々の様式によることが出来る。何を苦しんで純文学作品であるべき短歌、殊には短少な形式の短歌による必要があらう」)。

ですから、釈迢空と折口信夫というのはまさしく一体化した人生として、単に歌が上手いというような話ではないのです。それぐらい厳しい。それを堂々と、『神社新報』や『皇国時報』において示したのです。それに従って、ついてくる神主さんもいたわけです。戦時中だったら、桑原廉一郎という気比神宮の宮司をされた方がいます。この方は、桑原芳樹という皇典講究所、國學院大學にとっても大事な先生のご子息です。

今では、あまり直接教えを受けた方はいなくなっていますけれども、学問と創造を通して、折口先生はモラル、単なる道徳ではなくて、「道念」という言葉を使われます。折口先生は、自分が師とするのは金沢庄三郎先生と三矢重松先生だけだとおっしゃっていますが、三矢先生は、「神道の眼目」

とは一体何か、正直、「正」でも「直」でもないのだ、「誠」でもない、まさに正直というのは自然に出てくる正直なのだ、と述べています（「神道の眼目」『國學院雑誌』第5巻第3号、明治32年1月）。それはともかくとしても、三矢先生をもう一度とことん研究する必要があると思います。既にそういう研究も出てきていますし、校史センターでも、若い教員がやっています。

今、本学の神道文化学部では、歌について特別な講義をしていますけれども、国学にとって作歌というのは、ある意味では、学問の指針みたいな面もあります。当時の学校も作歌をやっていて、まずは歌をつくるということです。それに対しての教育を先生が実践されたし、大事にされたわけです。

配付したレジュメの最初のところに、武島羽衣という人が出てきます。「礼儀の学校で育ち、現に礼儀の教育を若い者に施してゐる私です」と書いてありますが、要するに、礼儀の学校で育ったということです。國學院のことです。そして、礼儀の学校で教えている。

武島羽衣は、はごろもフーズとは全然関係ないのですけれども、本名を武島又次郎といいます。國學院にいて、宮内省御歌所の寄人にもなり、敗戦後もずっと生きて、長生きされました。聖心女子大学等でも教えられて、女子教育でも有名だった方です。

この武島羽衣という人が、「葛の花　踏みしだかれて　色あたらし　この山道を　行きし人あり」という折口先生の歌に対して、「色あたらし」の「あたらし」を「愛惜し」と間違えたり、葛の花の色を間違えたりして、勝手に添削して、自分の短歌の雑誌に出してしまったのです。

怖いですね。それを聞きつけて、武島羽衣がこんなことをやっていますと斎藤茂吉のところに言うのです。斎藤茂吉は、かんかんに怒りまして、折口先生もそう思われて、昭和13年に改造社から出ている『短歌研究』に載っています（「去七尺状」『短歌研究』第7巻第12号、昭和13年12月）。

要するに、折口先生も幾ら年上で、國學院で習ったこともあるけれども、そういうことは礼儀に反するのではないか。私としても、それに対しては

ちゃんと答えるのが礼儀だろうと。やっぱり折口先生の偉いところというか、強気というか、自信がここにあらわれています。

折口信夫にとっての「天皇」と「神道」

また、当時一番偉くて、東大の名誉教授で、憲法・行政法をやっておられた筧克彦という先生が、東大を退官されて、國學院で神道、国民道徳を教えておられましたが、そのときに、「神ながらの道」ということで、教育だけでなくて、社会的にも筧流の神道が広がっていて、筧先生に対して文句を言うわけではないけれども、これは違っているのではないか、学問的には、本来的にはこうなんだということを一応書いてあります。

折口先生は、単に学術雑誌だけでなくて、大衆が読むようなものにも書いておられますので、単に象牙の塔だけで語っているのではなくて、私の想像としては、何かやりたいものがあったのだろうと思います。

その根本は神道といいますか、天皇だろうと。その天皇が戦前は現御神だと先生は確かにおっしゃっていて、いろいろなことを言っている。でも、戦後、昭和22年になりますと、『日本歴史』等において、今まで言っていた天子即神論というのは間違っていたとおっしゃっています（「宮廷生活の幻想—天子即神論是非」『日本歴史』第2巻第3号、昭和22年7月）。

やはり、もっとトータルに当時の人が言っていること、国民に対する筧先生の影響力なども随分大きかったということを含めて、考えて行く必要があると思います。

私の結論としては、折口先生にあったものは何かといえば、明治天皇に対する思いと、昭和天皇に対しても、敗戦後も変わらず、最後まで敬愛の念があったということです。

このことは、戦後、昭和27年の明治天皇百年祭、御生誕百年にしてもやっぱりあったのです。配付したレジュメにもありますが、折口先生は、昭和27年に「明治天皇」という詩をつくられております（「明治天皇」昭和27年11月、明治天皇御生誕百年記念。「現目に　我は仰げり　明治の御代の御繁

栄　言へば胸をどれど　省みて　悔いの深さよ　甦る日本の空青き日に　あゝ朝づたふ　大倭の鈴鐸　をのこ子も　をみな子も　出でゝ聴け。東京の　大神の　朗らなる大御声」)

この詩の内容に、明治天皇に対する敬愛の念が結実しているとともに、神武天皇以来の「天皇像」が凝縮されていると思います。こうした天皇の在り方と神武天皇とが重なって、折口先生は神武創業に非常にこだわったのではないか。

さらにいえば、折口先生が国学を語る時にいろいろなところで使っておられる、「橿原の御代に還ると思ひしは　あらぬ夢にてありけるものを」という、明治維新のときに苦杯をなめた国学者矢野玄道の歌があります。折口先生は、橿原の御代になる前までの道を突きとめたかった、のだろうと思います。

むすび

学問をやる上では、人とのネットワークということが、江戸時代、近世もそうですけれども、ものすごく大事です。

そのことを最初にやろうとされた先生は、この機構の前身である日本文化研究所長をやっておられた内野吾郎という人です。この先生の勉強の仕方というのは、単にある論文とか何とかではなくて、そのつながりからやっていく。それで、論をきちんと読んでいく。両方できれば良いのですけれども、おそらく通してやることが大事だったのだろうと思います。

ある人が言っていますけれども、私もそう思いますが、折口先生は国文学史だけはずっとやっておられたのです。『万葉集』と『源氏物語』を専門の演習でやる。それから、昭和15年には、演習科目として初めて民俗学を入れられた。これに関しては、河野省三先生が非常に苦労されたということです。ですから、国学に民俗学、国文学と民俗学を合わせる、簡単に言いますけれども、それぞれ当時の考え方に相違がありました。

こうしたことを、今後もう少し詳しく、単に國學院とか慶応義塾の話でなくて、全体をトータルに考え、研究していくことによって、新たな折口

信夫像がまた出てくるのではないかと思っています。まだ幾らもお話ししたいことがありますが、時間となりましたので、終わりにいたします。ありがとうございました。（拍手）

※本講演録は、國學院大學研究開発推進機構公開学術講演会（令和元年11月16日）の速記録及びレジュメに基づき、公開学術講演会担当者および本紀要編集担当者がまとめたものです。

（文責　宮本誉士・髙野裕基）